

C. パースの哲学を合理的説得可能性の要請論として定位する試み

阿部晃大

東京大学大学院経済学研究科博士課程

C.S. パース(1839-1914)が自身の哲学説を超越論的論証に類するような議論に依拠する形で展開していることは、しばしば指摘されてきた(Ex. Haack[1992], Apel[1995], Hookway[1995], Pihlström[1998])。ただし、その性格付けや評価については意見が分かれている。特に、パースが形而上学説を超越論的な論証によって導出することについて強調されることは少なく、その妥当性を擁護する議論はさらに稀で、十分にその妥当性に関する議論が蓄積されているとは言えない。

そのような現状を踏まえ、本発表では、まず、パースが超越論的な論証によって形而上学説をいかに擁護したかを確認し、その議論の内に妥当性を擁護可能な議論とそうでない議論が混在していることを論じる。なお、前者が、(論題にある)合理的説得可能性の要請論とでも言うべき性格の議論である。

続いて、擁護可能な議論から帰結する主張と、そうでない議論から帰結する主張をより分けて再構成し、彼の哲学説の内容とそれが意味するところについて、その妥当性ととも可能な範囲で論じてみたい。

さらに、合理的説得可能性の要請論としてパースの哲学説を再構成した場合に、その議論が、社会科学のような特殊科学へ、どのような恩恵をもたらす余地があるかについても簡単に議論する。

余裕があれば、そのような恩恵をパース以後の哲学説から引き出すことが難しいと考えられる理由についても、規範的な科学哲学説の発展(歴史的)経緯や社会科学の哲学における形而上学説の応用の現状などに触れながら考察してみたい。

<参考文献>

- Apel, Karl-Otto. [1981] "Transcendental Semiotics and Hypothetical Metaphysics of Evolution: A Peircean or Quasi-Peircean Answer to a Recurrent Problem of Post-Kantian Philosophy" in *Peirce and Contemporary Thought: Philosophical Inquiries Vol. 1*. Ketner, Kenneth L ed. Fordham Univ Press.
- Haack, Susan. [1992] "Extreme Scholastic Realism: Its Relevance to Philosophy of Science Today" *Transactions of the Charles S. Peirce Society*, 1992, 28, 1, 19-50, Indiana University Press.
- Hookway, Christopher. [1995] "Metaphysics, Science, and Self-Control: A Response to Apel" in *Peirce and Contemporary Thought: Philosophical Inquiries Vol. 1*. Ketner, Kenneth L ed. Fordham Univ Press.
- Pihlström, Sami. [1998] "Peircean Scholastic Realism and Transcendental Arguments" *Transactions of the Charles S. Peirce Society*, 1998, 34, 2, 382-413, Indiana University Press.